

教育研究業績書

2023年05月08日

所属：看護学科

資格：教授

氏名：新田 紀枝

研究分野	研究内容のキーワード	
在宅看護学, 家族看護学	在宅療養者, 家族, 訪問看護, QOL	
学位	最終学歴	
博士 (保健学)	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程	
教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. リフレクションを活用した事例検討の実施	2015年2月～現在	現任看護師の継続教育の研修において、看護師が関わって課題が残っている事例に対して、リフレクションを活用した事例検討を行っている。
2 作成した教科書、教材		
1. 家族マグネット人形	2006年4月～現在	事例のイメージがしやすいように、家族構成員のマグネット人形を作成し、学部、大学院の講義、学外の研修に使用している。
2. ロールプレイ台本	2010年4月～現在	大学院生が行ったロールプレイを院生の許可をもらい、台本に起こし、学部、大学院の講義に使用している。
3. 胃瘻モデル	2014年4月～現在	在宅療養者に多い胃瘻の演習用モデルを開発し、学部の演習に使用している。
4. ナーシング・グラフィカ 在宅看護論 地域療養を支えるケア 第5版	2015年1月	1 在宅療養者と家族の支援 4 在宅看護と家族 pp.53-60
5. ナーシング・グラフィカ 在宅看護論① 地域療養を支えるケア 第6版	2019年1月	2 在宅療養者と家族の支援 3 在宅療養の場における家族のとらえ方 pp.52-60
6. 自己透析刺針モデル	2021年9月	在宅透析導入に伴う自己シャント刺針のため練習用モデルを作成し、在宅透析実施者に使用してもらった
7. ナーシンググラフィカ 地域・在宅看護論 第7版	2022年1月	2 在宅療養者と家族の支援 3 在宅療養の場における家族のとらえ方 pp.66-75
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 大阪大学医学部附属病院看護部キャリア開発センター 「家族支援に必要な知識 (基礎編)」 講師	2010年10月～現在	病院内外の助産師、看護師を対象に家族看護に関する基礎的理論および家族への支援方法について講義を行っている。
2. 大阪府看護協会研修 看護研究4「クリティーク」講師	2011年1月～2016年11月	看護研究の発表経験があり、研究を指導する立場にある保健師・助産師・看護師約80名(1日研修)。看護研究概論、方法論、看護研究の倫理的的問題、クリティークの方法について講義し、論文のクリティークの演習をグループワークで行っている。
3. 大阪大学医学部附属病院看護部キャリア開発センター Basicコース (看護実践) 「退院支援」講師	2012年10月～2016年10月	病院内外の看護職者を対象に退院支援に関する基礎的理論および退院支援の方法について講義を行っている。
4. 大阪大学歯学部附属病院看護部看護研究発表会 講評	2014年1月～現在	病院所属の看護師、歯科衛生士を対象に看護研究指導と研究発表会の講評を行っている。
5. 京都府訪問看護ステーション協議会 看護研究研修講師 府民公開講座 看護研究発表会 講評	2014年4月～2017年3月	京都府訪問看護ステーション協議会に所属する訪問看護ステーションの訪問看護師に対して、看護研究の方法論、倫理的配慮に関する講義を行っている。京都府内6ブロックで行われる看護実践の場における研究について、倫理的に配慮した研究計画から発表まで継続して助言・指導を行っている。さらに府民公開講座として実施されている看護研究発表会において講評を行っている。
6. 大阪大学医学部附属病院看護部キャリア開発センター 「家族支援に必要な知識 (応用編)」講師	2015年2月～現在	基礎編受講者を対象に、事例を用いて家族看護の理論を解説し、援助方法について検討を行っている。
7. 兵庫県保健師助産師看護師実習指導者講習会 講師	2016年6月～2017年6月	「クリティーク」を担当
8. 兵庫県専任教員養成講習会 講師	2016年7月～2016年8月	「看護研究」の講義をオムニバスで担当
9. 兵庫県看護協会阪神南支部研修「家族看護を考えよう」講師	2018年11月2019年11月	兵庫県看護協会に所属する会員を対象に、家族を理解、支援する上で必要な基礎的な理論およびアセスメント・介入についての講義を行った。
4 その他		

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
1. 大学院修士課程論文指導	2017年3月	研究題目「外来がん化学療法を受ける訪問看護利用者と家族に対する熟練看護師による看護ケアの分析」
2. 大学院修士課程論文指導	2018年3月	研究題目「熟練訪問看護師が療養者と関係を作るために実施している初回訪問時の言動と意図」
3. 大学院修士課程論文指導	2019年3月	研究題目「急性期病院から退院した患者の緊急の再入院になる要因」
4. 大学院博士後期課程論文指導	2021年3月	研究題目「設定した初回訪問場面における新人訪問看護師と熟練訪問看護師の注目点の相違にもとづく特徴」

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 看護師免許・保健師免許・助産師免許		在宅看護学概論、在宅看護学Ⅰ、在宅看護学Ⅱ、在宅看護学実習、広域実践看護学特論D（在宅看護学）、看護研究方法論、看護研究倫理特論
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要

1 著書				
------	--	--	--	--

2 学位論文				
1. 少産少子化時代の育児支援 一幼児を持つ母親の心身の状態を中心に	単	1997年3月	大阪教育大学大学院 修士論文	母親の心身の状態と母親の過去の経験、現在の育児支援状況、母親の育児行動との関係を明らかにする目的に、1～3歳の幼児をもつ母親164名に質問紙調査を実施した。結果、母親の心身の状態は①実父の養育態度とその印象の是非、②乳幼児と遊んだ経験、③情緒的支援、手段的支援者数と夫の支援の有無、④夫婦間のコミュニケーションの有無、⑤身内の情報源の有無、⑥生活、育児の満足感の有無と強い相関があった。さらに心身状態が不安定な母親は、①子どもの生活リズムが乱れている、②一貫した態度で子どもに接することができないという問題が認められた。
2. 化学療法による遷延性嘔気の軽減に対する足浴後マッサージの有効性	単	2004年7月	大阪大学大学院 博士論文	シスプラチン製剤を含む化学療法を行った肺癌患者（実験群24名、対照群21名）に対して、シスプラチン製剤投与後3～5日目に足浴後マッサージを行った結果、足浴後マッサージを受けた者の全例にR-R間隔の延長、HFの増加というリラクセーション反応がみられ、8割以上の者に嘔気の軽減が認められ、足浴後マッサージは遷延性嘔気を軽減させるのに有効な看護ケアであることが示唆された。また、実験群対象者の足浴後マッサージに対して肯定的な評価が多く、患者の意向にあった看護ケアであると考えられる。

3 学術論文				
1. 一時的ストーマ造設患者の配偶者のレジリエンス（査読付き）	共	2014年9月	日本創傷・オストミー・失禁管理学会誌 第18巻第3号, p.305-312	在宅生活者の一時的ストーマ造設患者の配偶者のレジリエンスを明らかにすることを目的に半構成的面接を行い、Grotbergの枠組みに基づいて分析を行った。結果、配偶者の「周囲からの支援」が5カテゴリー、「個人的な内面の強さ」が8カテゴリー、「対処する力」が6カテゴリーが抽出された。配偶者は患者のストーマケアに必要な応じて、主体的に参加することにより、配偶者のレジリエンスが高められることが示唆された。
2. 三次救急外来における終末期患者の家族に対する熟練看護師	共	2015年8月	日本救急看護学会誌 第17巻第2号, p.24-34	本人担当部分：共同研究につき、抽出・ページ特定不可能 共著者名：新田紀枝、石澤美保子、宮野遊子、佐竹陽子、前田由紀、田中寿江、奥村歳子、上谷千夏、石井京子、藤原千恵子 三次救急外来における終末期患者の家族に対する熟練看護師の看護実践の特徴を明らかにすることを目的に半構造化面接を行い、質的記述的に分析を行った。結果、【患者の病状と経過】【家族の情緒

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
の看護実践（査読付き）				<p>的反応】【家族の理解度】【家族の資源】を観察し、【患者の予後】【家族の感情とその程度】【家族の認識】【家族が発揮できる力】をアセスメントし、【患者に最善を尽くす】【家族に寄り添う】【看取りの場を作る】【家族のもつ力を支える】援助を行っていた。</p> <p>本人担当部分：共同研究につき、抽出・ページ特定不可能</p>
3. ストーマ造設患者のレジリエンスの要素（査読付き）	共	2015年10月	日本創傷・オストミー・失禁管理学会誌 第19巻第3号, p.301-308	<p>共著者名：佐竹陽子、新田紀枝、浦出紗希</p> <p>ストーマ患者のレジリエンスの要素を明らかにすることを目的に、ストーマ患者13名を対象に、半構成的面接を行い、Grotbergの枠組みに基づいて分析を行った。結果、「周囲からの支援（I have）」が4カテゴリー、「個人的な内面の強さ（I am）」が4カテゴリー、「対処する力（I can）」が3カテゴリーが抽出された。レジリエンスをもつストーマ患者は自身のもつ強さを自覚しながらも、ストーマケアを継続して支えてくれる家族や医療者の存在を意識し、無理せず支援を求め、精神的に安定した状態でストーマに関するセルフケアを確立していくという過程を経ることが示唆された。</p>
4. インドネシアに学ぶ地域互助型保健医療システム—本邦における互助の定着にむけて—（査読付き）	共	2016年3月	佛教大学保健医療技術学部論集 第10号, p.25-38	<p>本人担当部分：共同研究につき、抽出・ページ特定不可能</p> <p>共著者名：佐竹陽子、新田紀枝、石澤美保子、前田由紀、田中寿江、高島遊子、奥村歳子、谷口千夏、石井京子、藤原千恵子</p> <p>本邦の高齢者支援ボランティアを考える上でインドネシアにおいて展開されている隣組ボランティアの活動指標を取り入れることを検討するために、農村過疎地域の高齢者の介護、生活、価値観などの思いを明らかにすることを目的に半構成的面接を行った。結果、住民は地域に住むことに意義を見出し、また生活を継続したいと願っていることが明らかになった。今後、高齢化の進む地域を運営するためには、ボランティアモデルの導入が有効ではないかと考えられる。</p>
5. 地域で生活しているストーマ保有者が体験する困難と否定的感情（査読付き）	共	2016年3月	大阪大学看護学雑誌 第18巻第1号, p.23-32	<p>本人担当部分：共同研究につき、抽出・ページ特定不可能</p> <p>共著者名：芝山江美子、田野中恭子、永井香織新田紀枝、太田暁子、廣井寿美、町田理恵</p> <p>本研究は、地域で生活しているストーマ保有者が体験する困難と否定的感情を明らかにすることを目的にストーマ保有者13名に半構成的面接を行い、ストーマ保有者が体験する困難と否定的感情を質的記述的に抽出した。ストーマがあることで体験した日常生活上の困難7カテゴリー、ストーマケアを行う上で体験した困難4カテゴリー、ストーマ保有者に生じる否定的感情8カテゴリーが抽出された。ストーマ保有者は、ストーマにより社会生活の活動を制限される困難を抱えていた。ストーマ保有者が体験する困難と否定的感情を理解し、援助することは、ストーマ保有者の障害受容を促進するうえでの一助となり得ると考えられる。</p>
6. 山間過疎地域に居住する高齢者の在宅療養上のニーズに関する研究（査読付き）	共	2016年3月	佛教大学保健医療技術学部論集 第10号, p.39-48	<p>本人担当部分：共同研究につき、抽出・ページ特定不可能</p> <p>共著者名：田中寿江、新田紀枝、佐竹陽子、前田由紀、高島遊子、奥村歳子、上谷千夏、石澤美保子、石井京子、藤原千恵子</p> <p>山間過疎地域に居住する高齢者の在宅療養上のニーズを明らかにする目的に、高齢者7名に面接調査を行い、質的記述的に分析を行った。結果、〔体の衰えから意欲も低下〕しながら同居家族や医療・介護サービス等を利用により在宅療養生活を継続させていた。〔通院手段の少なさ〕〔買い物の不便さ〕を感じながら生活をし、医療、介護サービスや〔近隣の手助け〕を受けて、〔一人で介護〕しており、介護負担や緊急時に不安を感じていることが明らかになった。</p>
7. 高齢者に対する足浴は有酸素運動となるか（査読付き）	共	2017年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル第2巻, p.75-81	<p>本人担当部分：共同研究につき、抽出・ページ特定不可能</p> <p>共著者名：太田暁子、新田紀枝、奥村歳子、芝山江美子</p> <p>本研究の目的は足浴が膝関節などの運動器に負担をかけない有酸素運動になるか検討することである。高齢者29名（平均73.2歳）を対象に、足浴を30分間行った。脈拍数、前額部および両下肢皮膚温の測定、主観的な運動感の評価の分析を行った。結果、40%の運動強</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
8. オストメイトと家族のレジリエンスの因子構造とレジリエンスに影響する要因 (査読付き)	共	2017年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル第2巻, p.53-63	<p>度となる脈拍数になった者はいなかったが、主観的評価では「運動した感じ」の変化に有意差があった。足浴が有酸素運動になるかの指標として脈拍数ではなく、酸素消費量等の観点からの検討が必要と考えられた。</p> <p>本人担当部分：共同研究につき、抽出・ページ特定不可能 共著者名：新田紀枝、本多容子、片山恵、田丸朋子、木村静、伊部亜希</p> <p>オストメイトの家族が経験する困難を乗り越えるプロセスに機能する力であるレジリエンスの構造、及び影響する背景要因を明らかにすることを目的とした。家族のレジリエンス項目は3因子が抽出され「問題解決力」、「支援認知力」、「前進的思考力」と命名した。信頼性、妥当性の検討を行い、尺度として使用できることが確認された。重回帰分析の結果、家族のレジリエンスに影響する要因は、主に「家族が排泄物に影響する食事や飲み物の知識を持ち、日々の生活に生かすことができている場合」であった。</p> <p>共著者名：前田由紀、新田紀枝、佐竹陽子、高島遊子、田中寿江、上谷千夏、石澤美保子、石井京子、藤原千恵子</p>
9. ICUにおける患者の情緒的体験 (査読付き)	共	2018年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル第3巻, p.25-34	<p>ICUにおける患者の情緒的体験を明らかにすることを目的とし、15名の対象者に半構造的質問によるインタビューを行い、質的帰納的に分析した。情緒的体験は57のコード、【不安】【苦痛】【安心】【心地よさ】【信頼】【闘病意欲】【喜び】を感じた体験の7カテゴリーが抽出された。さらにカテゴリーの情緒面の特徴からネガティブな体験とポジティブな体験に分けられた。ネガティブな情緒的体験は不安・苦痛が含まれ、生理的欲求の欠陥やICU特有の環境による苦痛を感じていた。一方、ポジティブな情緒的体験には安心・信頼・心地よさ・闘病意欲・喜びが含まれた。循環・呼吸状態不安定期では観察やモニタリングによる監視など看護師のケアの実践から患者は安心や心地よさ、信頼を感じるケアリング体験をしていることが明らかになった。</p> <p>本人担当部分：共同研究につき、抽出・ページ特定不可能 共著者名：和田直子、関口公平、新田紀枝</p>
10. 外来がん化学療法を受けている訪問看護利用者と家族に対する熟練訪問看護師による看護ケア	共	2020年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル第5巻, p.43-51	<p>外来がん化学療法を受けている訪問看護の利用者とその家族に対する熟練看護師による看護ケアを明らかにすることを目的とし、認定看護の資格をもつ訪問看護師15名を対象にし、インタビューガイドに基づいて半構造的面接を実施した。得られたデータから逐語録を作成し、看護実践について語られている部分を抜き出してコード化し、抽象度を上げてカテゴリー化した。結果、熟練看護師による看護ケアは213コード、20サブカテゴリー、【症状マネジメントをする】【服薬管理をする】【曝露への対応をする】【生活マネジメントをする】【利用者の情緒面を支える】【家族の情緒面を支える】【意思決定プロセスを支える】【多職種と連携して地域で利用者と家族の安定した生活を支える】という8カテゴリーが抽出された。</p> <p>本人担当部分：共同研究につき、抽出・ページ特定不可能 共著者名：畑中文恵、新田紀枝、久山かおる</p>
11. 訪問看護認定看護師が療養者と関係を築くために実施している初回訪問時の言動とその意図	共	2020年8月	日本在宅看護学会誌、第9巻1号、p.32-44	<p>訪問看護認定看護師が初回訪問において療養者と関係を築くために実施している言動とその意図を明らかにすることを目的に、訪問看護認定看護師の資格を持った看護師15名に対し、半構造化面接を行い、質的記述的に分析を行った。結果、初回訪問で関係を築くために実施している言動と意図について、①自宅に到着するまでは、【療養者の状況を知るために療養者の全体像を捉える】など4カテゴリー、②自宅に到着し療養者に対面するまでは、【療養者の生活状況を知るために暮らしぶりを捉える】など3カテゴリー、③療養者に対面した時は、【療養者の健康状態から心身の特徴を捉える】など7カテゴリーが抽出された。訪問看護認定看護師は3つの時期で療養者の暮らしぶりや心身の特徴を捉えながらニーズを模索していた。そして、人間関係を築くためだけでなく、訪問看護サービスの開始、契約に結びつなげるための言動と意図があったと考えられた。</p> <p>本人担当部分：共同研究につき、抽出・ページ特定不可能</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
12. 設定事例を使用した訪問看護認定看護師による初回訪問時に療養者と関係を築くための言動と意図	共	2021年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル、第6巻、p.47-55	<p>共著者名：森下和恵、新田紀枝、久山かおる</p> <p>訪問看護認定看護師15名を対象に、初回訪問において療養者と関係を築くために行っている言動とその意図を設定事例から明らかにすることを目的に、質的記述的研究を行った。対象者に設定した療養者の情報と住居図を提示し、療養者と関係を築くために語られた内容は①自宅に到着するまでは《療養者の全体像を捉えるために事前に情報収集をする》など3カテゴリ、②自宅に到着し療養者に対面するまでは《療養者の状況を知るために室内から現状を捉える》など2カテゴリ、③療養者に対面した時は《療養者を知るために言動から心身の特徴を捉える》など7カテゴリが抽出された。設定した事例を用いることによって、認定看護師が同じ療養者宅へ訪問する状況を作ることができ、療養者と関係を築くためにどのような情報からアセスメントをして、今後の継続した訪問へつなげようとしているのかを共有して考えることができるツールになると考えられる。</p> <p>本人担当部分：共同研究につき、抽出・ページ特定不可能 共著者名：畑中文恵、新田紀枝、久山かおる</p>
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 難病療養者のつらい思いをきくツールとして「センター方式シート」の一部を利用した訪問看護の実践	共	2015年11月	第5回日本在宅看護学会学術集会	
2. 在宅で療養者を介護している家族のレジリエンスに影響する要因	共	2017年9月	日本家族看護学会第24回学術集会	
3. 在宅療養者を介護している家族のレジリエンス尺度の検討	共	2017年9月	日本家族看護学会第24回学術集会	
4. 外来がん化学療法を受ける訪問看護利用者と家族に対する熟練看護師による看護ケアの分析	共	2017年11月	第7回日本在宅看護学会学術集会	
5. 在宅療養者のレジリエンス尺度の検討	共	2017年11月	第7回日本在宅看護学会学術集会	
6. ICF（国際生活機能分類）概念を取り入れた在宅看護学実習の記録用紙の検討	共	2018年12月	第8回日本在宅看護学会学術集会	
7. 熟練訪問看護師が療養者と関係を築くために実施している初回訪問時の言動と意図	共	2018年12月	第8回日本在宅看護学会学術集会	
8. 在宅終末期高齢者への過剰治療に対する訪問看護師の心理的ストレス	共	2019年9月	第50回日本看護学会-在宅看護-学術集会	
9. 設定事例を使用した熟練訪問看護師による初回訪問時の言動とその意図	共	2019年9月	第50回日本看護学会-在宅看護-学術集会	
10. 在宅終末期高齢者の	共	2019年10月	第50回日本看護学	

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
過剰治療			会-看護管理-学術集会	
11. 在宅医が捉える在宅終末期高齢者の過剰治療	共	2020年6月	第25回日本在宅ケア学会学術集会（高知）	
12. 訪問看護師が捉える在宅終末期高齢者の過剰治療	共	2020年11月	第10回日本在宅看護学会学術集会（Web開催）	
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 在宅療養者と家族介護者のQOLに影響するレジリエンスと背景要因に関する研究 報告書	共	2019年3月		
6. 研究費の取得状況				
1. 「在宅療養者と家族のQOLに影響するレジリエンスの解明と在宅療養支援モデルの構築」	共	2015年4月～2018年3月	科学研究費補助金（基盤研究C）	研究代表者
2. 外来がん化学療法を受ける訪問看護利用者 と家族に対する熟練看護師による看護ケアの分析	共	2016年5月	公益財団法人フランスベッド・メディカルホームケア研究・助成団体平成28年度（第27回）助成事業費	研究分担者
3. 在宅医療職者が経験する在宅終末期高齢者の過剰治療に関する葛藤の様相とその対処過程	共	2018年	公益社団法人大同生命厚生事業団2018年度地域保健福祉研究助成	研究分担者
4. 医療費シミュレーションおよび利用者の主観的評価からみた訪問看護利用の効果	単	2019年	科学研究助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究（C））	研究代表者
5. 訪問看護師の視覚メディアによる初回訪問での療養者と関係を築くための言動とその意図	共	2019年	公益社団法人大同生命厚生事業団2019年度地域保健福祉研究助成	研究分担者
学会及び社会における活動等				
年月日	事項			
1. 2013年8月～現在	日本家族看護学会 専任査読者			
2. 2015年4月～現在	日本看護研究学会 査読委員			
3. 2016年6月～2020年5月	公益社団法人兵庫県看護協会 地域ケア推進委員			
4. 2019年10月～現在	日本看護科学学会 和文誌専任査読委員			